



舍人皇子の釘の様（出土品〈手前〉とレプリカ〈奥〉）
笠の長径36mm 高さ7mm、軸は最大9mm四方の方形で長さ138mm

一木で削りだされた釘の様 ためし —レプリカ作成の効能

写真の木製品は、明日香村の飛鳥池工房遺跡から出土した、釘の様（ひながた）です。軸部の両面に「舍人皇子」「百七十」の墨書があるため、木簡として管理しています。舍人皇子（親王）は天武天皇の皇子で、『日本書紀』の編纂に関わった人物として知られます。この木製品は、舍人皇子（の宮）が、飛鳥池の地にあった工房に百七十本の釘を注文したときの見本なのでしょう。

今回、釘の様のレプリカを作成するにあたり、その構造に関わる小さな発見がありました。これまでの笠頂部の観察によると、様の軸は笠に差し込んだもの、つまり、別々の材を組みあわせたものとみられてきました。ところが、保存処理の過程で笠の汚れを取り除くと、その木目はみごとに連続しており、軸は笠の頂部まで貫通していない可能性が生じたのです。それでは、軸は笠の内側にどのくらい刺さっているのか、精巧なレプリカのためにぜひ知りたい情報です。この点は、表面観察ではいかんともしがたく、科学の力を借りることになりました。マイクロフォーカスX線CT撮影を試みた結果、笠と軸とは組みあわせたものではなく、一木から削り出されていることがわかりました。

意外な事実を前に、なぜわざわざ一木から…、という素朴な疑問が頭をかすめました。製品の釘も軸と組みあわせたものを作るのだと誤解されないようにした、という意見があり、なるほどと思った次第です。

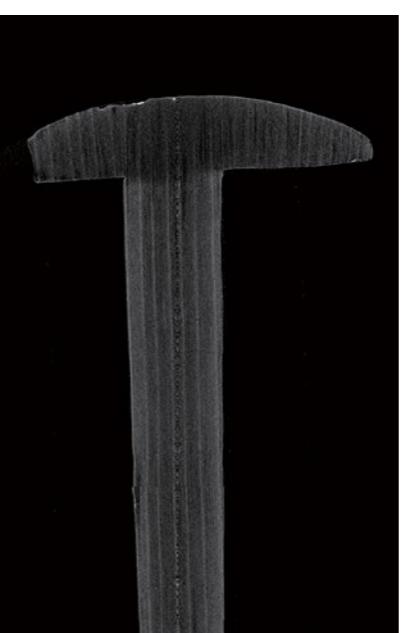
末尾ながら、このレプリカは、文化財活用基金の助成をいただき作成したもので、今回の発見もその成果の一つです。今後、当研究所の展示公開等に積極的に活用してまいります。篤志をいただいた皆様に、深甚の謝意を表します。

（都城発掘調査部 山本 崇・田村 朋美）



カラー写真（原寸）

赤外写真・表（原寸）



X線CT画像

撮影：村田 泰輔（埋蔵文化財センター）

マイクロフォーカスX線CT：SMX-100CT-D（島津製作所製）

画像処理：脇谷 草一郎・柳田 明進（埋蔵文化財センター）

画像処理ソフトウェア：Dragonfly（Object Research Systems 社製）